

国内経済情勢

概 観

中小企業設備投資は依然低調裡に推移しており、前月増加をみた住宅投資も再び減少を示した。一方、輸出は自動車等に伸び悩みがみられるものの総じて高水準を維持しており、大企業設備投資も堅調を持続している。また、公共事業請負額は引続き前年水準を上回っており、関連資材の一部に荷動き回復の兆しもみられる。この間、個人消費は、6月中天候不順の影響で伸び悩んだあと、7月入り後は本格的な暑気の到来から夏物季節商品を中心に持直しを示している。こうした中で、素材関連メーカーは抑制的な生産姿勢を維持しており、製品在庫調整は跛行色を伴いつつ引続き緩やかに進捗している。

7月の商品市況は、製材、合板、棒鋼等一部品目が需要の低迷から軟化したものの、メーカーの供給抑制姿勢が維持される中で、海外市況高や一部円安の影響もみられ総じて底堅い動きを示した。この間、卸売物価は、為替円安に加え電力料金夏季割増適用もあつて小幅ながら続騰した。一方、7月の消費者物価は野菜や被服の値下りを主因に下落し、前年比上昇率も前月をさらに下回った。

金融面では、4～6月のマネーサプライは郵貯等他の金融資産へのシフト一巡等を映じて小幅ながら前年比伸び率を高めた。また、6月の全国銀

行貸出約定平均金利は引続き低下をみている。

6月の国際収支をみると、貿易収支が輸入の落込みを主因に黒字幅を拡大したため、経常収支(貿易収支季節調整後)は3か月連続の黒字となった。もっとも長期資本収支が対外証券投資を中心に大幅な流出超を記録したため、総合収支では引続き赤字を示した。7月の為替相場は、米ドルが主要通貨に対し全面高となる中で一段と円安化した。

6月の生産、出荷は増加

6月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)、同出荷(速報)は前月減少(各-1.8%、-3.4%)のあとそれぞれ+2.0%、+1.8%と増加した。もっとも、4～6月通計では、生産、出荷とも-0.6%とわずかながら減少した。

* 以下増減率は特に断わらない限り、前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

6月の財別生産、出荷の特徴をみると、資本財輸送機械(小型自動車、トラック)は前月大幅減少の反動等から、また建設財は公共事業関連品目(セメント、コンクリートパイル、鉄骨等)の荷動き持直しもあって、ともに増加を示した。一方、耐久消費財をみると、天候不順からエアコンが減少したものの、輸出好調のVTR、ラジオ等を中心に増加した。反面、一般資本財の生産は月々の振れの大きい化学機械、電子計算機等の反動減が響き減少し、また非耐久消費財(カラーフィルム、敷物等)の生産も微減となった。

この間、生産者製品在庫(速報)は前月微減

(-0.1%)のあと+1.6%と増加した。素材関連の製品在庫の動きをみると、鋼板類が輸出船待ち在庫の積上りを映じて増加したほか、非鉄金属(アルミ地金)、化学製品(プラスチック、か性ソーダ)などで出荷の減退を主因に増加がみられたが、条鋼類、化学繊維、上質紙等多くの品目ではメーカーの減産継続に支えられて緩やかながら調整が進捗している。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、4~6月の一般資本財出荷が+2.9%と大企業製造業、電力向けを主体に増加を続け、建設工事受注額(民間分、速報)も10.5%の伸びを示した(前四半期+4.6%)。また、7月の公共事業請負額(前年比)は+6.9%と引続き前年水準を上回った(前月+16.8%)。

6月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は天候不順による夏物衣料等季節商品の売行き不振が響いて+4.8%(前月+8.4%)と低い伸びにとどまった。もっとも、7月入り後の都内百貨店の売行きは本格的な景気到来もあって回復をみている模様である。この間、耐久消費財の売行きをみると、家電製品は6月中エアコン、扇風機等夏物商品が低調裡に推移したが、7月に入り天候回復とともにかなり売行き好転をみている。一方、7月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は-5.3%となった(前月-6.7%)。

6月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、前月大幅増加(+12.4%)をみた反動もあって-6.6%と落込んだ。

雇用情勢をみると、6月の有効求人倍率は0.66倍(前月0.65倍)と大勢横ばいに推移し、完全失業率は2.29%と前月(2.39%)を下回った。また常用雇用は+0.2%と引続き増加した。

消費者物価の低下続く

7月の商品市況をみると、建材(製材、合板)、アルミ地金が住宅投資不ぞえ等を映じ軟化傾向を改めておらず、棒鋼も流通、ユーザー筋の手当買い一巡などから反落したが、他方で非鉄、天然繊維、塩ビ等が上伸したほか、石油製品が反発、また、これまで低迷を続けてきた段ボール原紙、生コンクリート等も下渋るなど、総じて底堅い商状を呈している。このように品目によって上昇の動きがみられるのは、メーカーが生産抑制姿勢を維持ないし強化している状況の中で、天候回復に伴う消費の持ち直し(天然繊維等)や海外原材料市況の上昇(非鉄等)、為替円安の進展による原料コスト高(石油製品等)、安値輸入玉の流入鈍化(塩ビ等)などの要因が働いたためである。

一方、7月の卸売物価は、為替円安の影響に加え、電力料金夏季割増適用もあって+0.4%と続騰した(前月+0.4%)。

7月の消費者物価(東京、速報)は、野菜、被服の値下りを主因に-0.3%と下落した。なお前年比上昇率では+4.1%と前月(+4.8%)をさらに下回り、季節商品を除くベースでも+3.7%(前月+3.8%)と引続き低下した。

貸出金利は引続き低下

7月の金融市場をみると、銀行券は2,203億円の還収超(前年同3,698億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+4.3%と4月をボトムに持ち直し気味に推移している(4~6月+2.1%)。一方、財政資金(日本銀行売却の政府短期証券償還を除く)は源泉徴収税を中心に税揚げがかさんだものの、国債発行額の大幅圧縮や資金運用部による対市中条件付国債買入の実施等から揚超幅は前年を大きく下回り、月中の資金不足額は10,434億

円(前年同 26,263億円)となったが、その大半は日本銀行が5月に売却した政府短期証券の償還により調整された。

この間、コールレート(無条件物)は、上記のような資金不足地合いを映じて強含みに推移し、月中では0.0625%上昇、7.3125%で越月した。一方、手形売買レート(2ヵ月物)は月初やや弱含んだが月末にかけては都銀、外銀の売り姿勢が強まり再び強含み、結局通月では横ばいとなった(月末7.5%)。

6月のマネーサプライの伸び率(M₂+CD平残、前年比)は前年の伸びが低かったことを主因に8.3%に上昇し(前月+7.5%)、4~6月中平残でも郵便貯金等の金融資産へのシフトが金利先安感の後退を映じて一巡したこと等から+7.9%と前四半期(+7.6%)をやや上回った。一方、6月の全国銀行貸出約定平均金利は決算、賞与資金等季節資金貸出を中心に-0.091%と前月(-0.107%)に引続き低下した。

7月の公社債市況は、上中旬一進一退の動きを示していたが、下旬入り後は米国金利の堅調、為替円安の進展等を背景に下落歩調をたどった。この間、7月の長期国債はもっぱら資金運用部により引受けられ、シ田消化は行われなかった。一方、株式市況は、月初、前月来の上伸歩調を続け既往ピークを更新する場面もみられたが、その後は外人買いの後退等もあって小反落した(東証指数月末592.15、月中+6.00)。

經常収支は3ヵ月連続の黒字

6月の輸出(通関、ドルベース)は-2.4%と前月(-2.4%)に続き減少した。もっとも4~6月

通計では+2.0%(前期+6.0%)と底堅い増勢を維持し、数量ベースでも+4.5%と前期(+3.6%)を上回る伸びを示した。6月の輸出を品目別(ドルベース)にみると、テープレコーダー、ラジオなどの弱電製品が根強い伸びを続け、また合織、プラスチックなどの素材品目も増加したものの、自動車は欧米等への輸出自粛の影響もあって伸び悩み、船舶、鉄鋼も前月増加の反動などから落込みをみた。

6月の輸入(通関、ドルベース)は4.2%の減少となった。また、4~6月通計でも-3.4%と三四半期ぶりの減少に転じ、数量ベースでも-3.2%となった(前期+1.1%)。6月の輸入を品目別(ドルベース)にみると、鉄鉱石、砂糖、とうもろこしがかなりの増加となったものの、小麦、羊毛、綿花が引続き減少し、前2ヵ月増加した原油も数量要因を中心に著減した。

6月の国際収支は、上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が2,158百万ドルの黒字(前月同1,444百万ドル)となり、經常収支(貿易収支季節調整後)も890百万ドルと3ヵ月連続の黒字を記録した(前月同311百万ドル)。もっとも、長期資本収支は対外証券投資を中心に本邦資本が高水準の流出をみたことから1,825百万ドルの大幅流出超となり、総合収支では954百万ドルの赤字となった(前月同1,172百万ドル)。

7月の為替市場をみると、海外市場において米ドルが主要通貨に対し全面高となる中で一段と円安化した(月末239.75円、月中14円の円安)。

(昭和56年8月11日)